

市民まちづくり懇談会会議録（発言要旨）

と き	平成29年5月31日（水） 19:30～20:45
と ころ	本庁舎 2階 大会議室
市出席者	市長、政策調整部長 事務局（政策調整課：4名）
参加人数	30名（男性28名、女性2名）
会議録（発言要旨）	
男性A	人を呼ぶ構想になっているが、地域に人を増やす構想では、どういったところを考えているのか。
市 長	人口減少対策はすでに地方創生戦略にまとめられている。人口減少の最大の要因は若い人がいなくなっていることです。10代で圧倒的に、特に高校卒業時には8割が豊岡を離れます。逆に20代では帰ってくる人の方が多いですが、10代で失われた人口の40%ぐらいしか回復できていない。ほかの年齢層では社会減は起きていない。 若い人の数が減ったうえに、若い人の未婚率が上昇しているので夫婦の数が減る。夫婦一組あたりが産む子どもの数は平成25年の数字を見る限り増えている。3人目以上の子どもの数は実は減っていないが、子どもの数が減っているのは1人目が減っているからです。その理由は夫婦の数が減っているからです。減った子どもが大きくなって高校を卒業するとき、いなくなるという繰り返しの中で人口減少が進んでいるので、ターゲットは若い人をどれだけ取り戻すか、あるいは地元に留めるかしかない。 ただし、地元に大学がないので、子どもたちが出て行くのはある意味あたりまえで、若いうちに広い世界を見てみたいというのは当然のことです。私たちは世界中素敵などころがあるから見て来いというくらい度量を持って送り出さなくてははいけない。 しかし取り戻すための戦略はあるが、例えば仕事はどうするのか。やりがいのある仕事がないといけない。豊岡のターゲットは靴と宿泊です。豊岡の産業で一番外貨を稼ぐのは宿泊で、つまり観光が稼いでいる。2番目は靴です。豊岡の中で靴自体の産業規模は5番目ですけれども、輸入が少ないので靴の差引の外貨の獲得額は2番目です。そこで豊岡市は地方創生戦略で宿泊と靴を二大基盤産業に位置付けて、そこを業界の方々と徹底して議論をして、どうすれば大きく強く魅力的にできるか、あるいは高付加価値で稼げるかを話し合って実現をする。そこに若い人の受け皿を作っていくという作戦を立てている。 今、城崎の宿泊が順調なのは、海外の人が増えてきているからです。2020年に10万人泊を達成するのが豊岡の狙いです。このとき旅館の人がする仕事というのが、海外の方々に豊岡のこと城崎のことを伝える、あるいは向こうの国の人々とやりとりをする、そういうコミュニケーションをとるのが重要な柱になり、若い人のやりがいのある仕事になるのではないかと。 靴は2013年に東京の足立区を抜いて出荷額が日本一に躍り出ている。今、靴を作るのは豊岡だと、世界最高峰のデザイン賞を獲得するようなバッグも出てきた。ものづくりなら豊岡で！というふうに若い人の受け皿ができるのではないかと。そんな考えに基づいて中核産業というものを非常に重視していて、どんなふうに規模を大きくしていくかが大きな柱になっている。
男性B	子どもたちへ対してこういうことをしていくのは素晴らしいことだ。子どもたちにはすぐに成果は出てこないだろうと思うので、大人に対し地域への愛着を育む取組みをベースにし、次は子どもたちへ、ということも考えていくべきでは。
市 長	ローカル&グローバルコミュニケーションと言っているが、豊岡のことを深く知っていて、豊岡に対して愛着を持っていて、でも世界の人たちと堂々とやりとりをする、自分のまちのことを誇りに思っちゃんとコミュニケーションがとれる子どもに育てましようというのがある。子どもたちが豊岡を支えるようになるまではかなり先ですが、子どもたちのことは着実にやっておかないと、いきなりには出来まないのではやらなければいけない。 他方で今の大人はどうするかということは、もちろんとても大切なことだと思う。中でも若い人がいなくなっていることが人口減少の最大の要因でもあり、そのことが豊岡にとって戦うべき最大の課題となっているので、ここを考えなければいけない。 私自身が思っているのは、今豊岡に若い人が帰って来ないのは、豊岡で暮らすことの価値を

	選んでいない、きつい言い方をすると、豊岡で暮らすことの価値を否定している。大学を卒業するときに豊岡に帰って働くか、東京で暮らすかといったときに、彼らは豊岡を選んでいない。私たちは否定されている、少なくとも私たちは選ばれていないと考えなくてはならない。 選ばれるようなまちにするには何が必要なんだろうと考え、すでにある仕事の中で自分がやりがいのあるような仕事があるのが一つ。若い人の芽をつぶさない、若い人が失敗を恐れず挑戦ができる。まちづくりの中でも、若造は黙ってと言われたら全くやる気がなくなる。若い人たちもちゃんとまちづくりの表舞台に出てきて意見を言うけれどもちゃんとフォローされて、まちづくりが若い人にまかされる。そうすると自分はこのまちにいていいんだ、このまちにすることに意味があると見えてくるんだろうと。 逆に考えると、豊岡に帰ったって年寄りになるまで意見が言えない、まちづくりに関しても唯々諾々と長老の意見に従うだけだとなったら、若い人は絶対帰って来ない。高齢者の方はまちづくりの中で引き続き元気に役割を果たしていただかないといけないが、同時に若い人自身が表舞台に出てきやすいような雰囲気をつくっていく。雰囲気をつくるには具体例を一つ一つ積み重ねていくしかないんだろうと思っている。 例えばですが、今年9月に城崎で「城崎怪談」（お化け屋敷）というイベントをやる。（中略）お客さんを探すのが狙いではなくて、学生たちの関心を強めるのがこの事業の最大の狙いです。同じようなことがこれからいろんなことで起きてくると、豊岡に行くと自分たちは何かおもしろいことができる、そういう経験があるとその中からリーダーも出てくるでしょうし、このまちに対する愛着であるとか面白さが見えてきて、彼らが表舞台に出てくるのではないかな。そんな作戦を立てつつあり、そういうことをしながら大人に対するアプローチをしていきたいと考えている。
男性C	平成29年度から豊岡市の小学生に英語教育をしていくということだが、ALTを中心にしていくのか、小学校の先生に負担をかけない程度にしていくのか教えていただきたい。
市 長	基本的にはALTを主体にもっていきたいと思っている。つまり発音からセンスからなかなか今から小学校の先生に英語を学んでもらっても実際のところ無理ですし、逆に日本語をしゃべる先生が補助なんてやるとまったく機能しなくなる。 基本的に外国人の指導助手をベースにしながら、日本人の先生のほうはこぼれていく子がいなかったか、寄り添いながら見守っていく感じにできればと思っている。 ちょうど私たちが日本語を親からシャワーのように浴びせられたり、まわりの人の日本語を聞いて知らず知らずのうちにたどたどしくも日本語をしゃべれるようになったのと同じように、子どもたちはたどたどしくても、まずは英語を話してみる聞いてみる。学年が上に行くほど学ぶという方向に変えていきたいと思っている。
男性D	子どもたちにも「豊岡市いのちへの共感に満ちたまちづくり条例」に接する機会をつくってはどうか。（子どもの頃から接すると生かせるのでは。）
市 長	命への共感に満ちたまちというのは、永遠に追いつける目標というふうに私たちは位置づけている。命は限られていますから私の命は私にとってとても大切で、それがわかるとあなたにとってあなたの命は大切ということもわかるのではないかな。人権だとか難しい言葉を使わなくても、共感のベースで命を大切にということがでてくるのではないかな。そんな願いを込めた条例です。 命への共感に満ちたまちというのは、しあわせを感じるまちをつくらうということであるので、学校の現場でも出来る限り教えるべきだというのはその通りだと思う。 今日、教育長がこんなことを言っていました。教育長は豊小で6年間校長をしているんですが、2000年に小学校6年生がバーチャル同窓会をやって、子どもたちに高校大学を卒業したあと、あなたはどこでどんな仕事をしているかと、まずは空想をさせる。そのうえで同窓会を作文も書かせたら、全員が豊岡にいないという前提で書いて、豊岡にいないイメージした子は誰もいなかった。 3年ほど前に同じことをやった時には、2割～3割位が豊岡で何かをしているとイメージした子がいた。この間に何があったんだろう。2000年の頃にはそもそも「ふるさと教育」という言葉すらなく、学校現場ではまだそこを本気でやっていなかった。その後ふるさと教育のことを盛んに言うようになってきて努力がなされ、その結果ではないだろうかと思う。教育長は喜んでいただんですけど、ちゃんと教えることで大きな変化につながっていくのではないかと考える。 そのときは小さなことのように見えても、やがて大きな変化につながり得るのではないかなと思う。ローカル&グローバルコミュニケーションも今すぐ効く話ではないが、それを5年10年続けることによって大きな変化につながっていくんだろうと思う。ですので、命への共感に満ち

	たというものの考え方をちゃんと伝え続けていくというのも、大きな変化につながるのではないかと思う。
男性E	先日、小学校の参観日で、絵を見せてこの絵に題名をつけてくださいという中で、誰もが答えたら正解になるにもかかわらず、子どもたちはなかなか手を挙げなかった。そんな授業だったので保護者の中にはちょっと勿体ないんじゃないかという意見があったようだ。 私としては、親世代は知識一辺倒な教育を受けてきたが、これからはAIやコンピューターには替えられないような芸術の分野を伸ばす方向づけには大賛成だ。そういった分野になかなかついていけない大人に対するアプローチが何かあればと思うが、どうか。
市長	子どもに限らず、私がいろんなところで講演をして、そのあと質問がある人と聞いてもほとんど手が挙がらない。フランス人を黙らせるのと日本人を喋らせるのは本当に難しいと言われるぐらい、本当になかなか表現をしない。 ローカル&グローバルコミュニケーションの英語の学習はこれを打ち破る可能性を持っている。幼稚園、保育園、こども園の英語遊びは、ただ英語を耳で聞かせているだけではない。 英語の向こうにある積極的にコミュニケーションをとるという文化そのものを伝えようとしているので、子どもたちが積極的に表現するのは当たり前なんだという態度が、おそらく英語遊びで出てくるんじゃないか。あるいは演劇の中で出てくるんじゃないか。クラスでは成績の良い子悪い子は綺麗に序列になっていて、成績の悪い子は発言がしにくいけれど、ダンスになると急にそういう子が前面に出てくる。演劇になると、なにも成績が良い子だけがいい演劇をするわけではなくて、違うものが出てくる可能性がある。いろんな出番があるということがローカル&グローバルコミュニケーションの中で出てくるんじゃないかと思っていて、その意味でも子どもたちが積極的に発言することを期待している。 AIの話が出たが、ものすごく深刻な話です。ロボットは人間の体に置き換わるだけです。重いものをロボットが持つ、熱いところでロボットがやってくれるのは皆さん違和感がないと思いますが、AIは頭で知能です。人間はいったい何をするのかということになる。 残る仕事があると言われている。3か月後に99.9%の確率で死ぬと言われたら、診断は正しいかもしれないけれど納得できず怒りが込み上げてくるでしょう。そのとき私の気持ちに寄り添って、少しずつ少しずつ和らげながら最期安らかに死を迎えることができるのは人間しかない。そんなことはAIにできるはずがない。共感であるとか、弁護士の場合でも過去の判例ではなく交渉によってまとめるなんてことは人間にしかできない。美的なセンス、芸術的なセンスなんかもそうだと言われている。 だいたい2030年頃に関わり始めると言われている、2030年というのは今の幼稚園、保育園、こども園の子どもたちが大学を卒業して就職する年です。今から子どもたちに美的センスや心に寄り添うような共感の能力であるとかを養っておいてもらわないと、この子たちが今から働こうというときに仕事がない可能性がある。その時にあったとしても、それから15年後は確実になくなっている。 実は豊岡の教育は、子どもたちにもっとアートを教えなければいけないとか共感する能力を積みなければいけないということを今考えている。私もそうなんです、大学を受験するときにみんな美術、音楽、体育を捨ててきた。しかしこれからはそれらが大切になる。でもそれを大人たちは知らない、考えたこともない。 仰るとおり、長期的な展望を基に、今そこに力を入れなければいけないことを語っていかなければ、事態はなかなか変わらないと思う。 重要な指摘をいただきましたので、今後この基本構想を市民の皆さんに訴えたり、これをさらにブレイクダウンしたような事業を市民の皆さんに説明するとき、そのことをしっかりと訴えていきたいと思っている。本当にこれは今から考えなくてはいけない。先の話ではないと思う。